時をかける爺さん

そいつは突然現れた

夢野市太郎

時をかける爺さん

そいつは突然現れた。

　朝、いつものようにＢＳニュースを見ていた。またチベットで焼身自殺が起きていた。実際に人が全身を炎に包まれてもがいていた。さすがにそのまま映像として流すのはまずいという放送局の配慮からなのだろうか、炎に包まれている人の像にはボカシが入っていた。周囲の人達は自分の服を脱いで、その服を炎にたたきつけ火を消そうとしたり、手を出して助けようとして、炎の熱さにびっくりしたように手を引っ込めたりしていた。そのうちの一人が一瞬カメラのほうに向いた。私と目が合った。なんとも哀しそうなやるせなさそうな表情をしていた。そのとたん、私の目から涙が流れた。ほとんど条件反射だった。いつの頃からかそうなってしまった。以前は他人のことで涙なんか流さなかった。涙を流すときはいつも自分のことで哀しくて泣いていた。私は他人の心をほとんど理解できない子どものまま思春期を迎え、好きになった女の子の関心をひこうと考えたのにどうしていいのかまるでわからず、ただ自分につごうのいい妄想に耽るだけの情けない青春時代を過ごした。社会人になってからは自分と周囲の人達とがどうしても理解し合えないという思いに苦しんだ。だからひたすら肉体も精神も強くなろうとした。仕事も誰よりもできるようになろうとした。そうしたら逆に自分の周りに人がいなくなった。

「うわー、やっぱりこの人の話は通訳がいるわ」

とパートタイマーのおばさんに言われたこともあった。普通の日本語で普通の会話していたのに。いわゆる空気の読めない人間だったのだろう。でもそんな時でもただ強くなろうと自分に言い聞かせてきた。いつ過労死してもおかしくないほど理不尽に長時間働かされているときも、仕事中にケガをしたときも、代わりの者がいないという一言で、休暇をとることもできずに働いた。

ほかに逃げ道が見つからないからただ我慢して働いてきた。いろんなことをやりたいのを我慢してきた。それが５０歳を超えて突然、会社が倒産しハローワークへ通い出すと他人の哀しい出来事で涙を流すようになった。その人のことなど何もわかっていないのにＴＶで哀しそうな人の映像を見るだけでまるでパブロフの犬の涎のように反射的に涙を流すようになった。老人ぼけなのか、別の心の病なのか自分ではわからない。ただ、他人の姿を通して自分の姿をみているだけなのかもしれない。ただ精神医療の医者の世話になろうとは思わない。心の医者をあまり信用していないからだ。人間の心の病気を体と同じような方法で解決できるようには思えないのだ。ましてや薬さへ与えておけばそれで心の病がよくなると考えている医者には絶対罹りたくない。心の問題を安易に薬で治寮する病気と判断するという発想そのものが人間性を軽く見ているようで、とても気持ち悪くて受け入れられない。薬はあくまで補助的なものでなければならないはずだ。心の病気の全てが脳の病気とはいえないと思う。それは私の経験からも確信していた。

思春期に入った私は、過剰な自意識を持て余し、人の多く集まる場所に近づいただけで真っ赤になって茹で蛸のようになっていた。特に電車やバスのように、狭い場所に多くの人が集まっているところは苦手で、電車やバスをみただけで赤面するような情けない少年だった。しかし、大学に入学し、学生会館のホールで上映されていた他大学でおきた事件のドキュメンタリー映画を観ていたら、私の両脇に私より少し年上と思われる女性が座り、映画が終わったとたん、彼女たちは私の両方の腕をしっかりと掴み、シュプレヒコールを上げ始めた。「戦うぞ、戦うぞ」という声に首を傾げていると、突然「わっしょい」というかけ声とともに彼女たちは私の両方の腕をしっかりと掴んだまま学内のデモ行進を始めた。私は状況がまったく理解できないままよろよろと彼女たちとデモ行進を続けていると、デモ隊は学外に出た。それにはさすがに私も慌てたが、思いの外彼女たちの力が強く、また自分の腕を力一杯振り回して、女性から逃げるのもなんとなく情けなく恥ずかしいと思い、彼女たちにずるずる引きずられるようについていくと、街角に待機していた機動隊員がうぉーと声を上げ近づいてきたとたん、彼らが手にしていた楯で頭を殴られた。その時はもう訳がわからず、今度は自分から両脇の女性の腕をしっかり掴んでいた。し

かし、デモ隊が解散したときには、恐怖感は薄れ、なんだか奇妙な興奮が残った。その後も彼女たちに誘われ喫茶店や学生会館などで話をしているうちに、マルクスやレーニンの文庫本を買って読むようになった。それまでは「大学生の数学」を片手に、下宿の近くの公園で勉強していたのだが、マルクスなどを読み出すと、もう数学など勉強している気にならなくなった。やがて、学生運動が活発になってくると、生協で売っていた党派の政治機関誌を読むようになった。学内のアジビラの内容がわかるようになった頃、学部学生大会で司会者から発言を求められた。その司会者は私の両腕を掴んでいた彼女たちのグループの指導者的立場の人だったから、初めから私に発言させるつもりだったのだろう。私は突然のことに面食らったが、大勢の中で指名されて逃げるのはとても格好が悪いと思ったので、茹で蛸になりながらもそれまで詰め込んできた知識でもぞもぞ言っていると、「なに言ってんだかわかんねえぞ」とか、「ナンセース」という怒号やヤジが跳んできた。しかしそのなかでたった一つの「異議ナーシ」という細くて高い声にはっとした。それからは暇さえあれば政治機関誌を読んだ。そして２ヶ月後の学部学生大会では自分から発言を求めるようになった。もちろ対立組織からはがんがんやじられたが、それがまた快感になった。それ以後私は変化した。高校時代のいつも多勢の後ろや、車内の隅っこで茹で蛸になって縮こまっていた私ではなくなった。学生時代の友人たちは、私の高校時代の惨めな姿を話しても決して信じてくれない。それだけ大きく変化したのだ。その時に気づいた。人間の多様性や変化する力を。人間には様々なタイプがあり　、誰もが他人とどこか違っていて、それなりに一生懸命生きている。そしてちょっとしたことがきっかけで大きく変化することができるということを。精神医療とはそうした人間自身が変化する可能性を引き出すことだと思うようになった。ただ、学生運動・政治活動から離れ、社会人になってからは人生の目的を見失い精神的に不安定になったが、それでも今までそれなりに生きてきた。社会的にも家庭内でも大きな問題をおこさずにきた。だから現在も壊れかけた心となんとかうまく付き合って、日常生活に支障をきたさないように心がけている。　ただ、その条件反射泣きの頻度が多くなってきて、先日などは家の近く

の公園をランニングをしていた時に、ウォークマンからピーター・ポール＆マリーの「悲惨な戦争」が流れたとたん、昔観た「ジョニーは戦場へ行った」のシーンを思い出して、涙を流してしまった。戦場で負傷したジョニーは両手両足どころか、声と視力を失った。そんなジョニーは全身でモールス信号を打って訴えた。「僕を見世物小屋に出してくれ。そこで僕は訴えるんだ。戦争の悲惨さを」だが、そんな訴えは受け入れられるはずがなかった。そこでジョニーはさらにモールス信号を打った。「見世物小屋に出すことがだめなら僕を殺してくれ」と。気がついたら私は走りながら涙をポロポロ流していた。慌てて首に掛けていたタオルで顔の汗をぬぐうふりをして涙をぬぐった。こんなことでは完全に心が壊れて一日中泣いてばかりの爺さんになってしまうという恐怖感に襲われることがあるが、どうせ残された人生はあとわずか。今までそれなりに生きてきたんだからこれからもそれなりに生きればいいんだ。苦しいことや嫌なことがあってもそれほど長い期間ではないさと思いなおす。こうした心境になれたのは、年をとって、残りの人生が少なくなったという自覚からだろう。死ぬことは怖いが、目の前の苦痛を回避してくれる。そういう意味では年をとるのはすてきなことだといえる。

　ガラガラガラー。ＴＶを見ながら涙を服の袖でぬぐっていたときに突然玄関の戸が開く音がした。チャイムを鳴らすことをしないでをいきなり玄関の戸を開けるなんてことをするのは私の兄弟でもやらないことなのに、一体誰なんだと驚いて部屋を飛び出して玄関を見ると、そいつが私と同じように驚いた顔で立っていた。

　そいつは私と同じ顔をしていた。中途半端に伸ばした無精ひげも同じだった。私がいつも近所の店に買い物に行くときの服装をそいつもしていた。手には私が週に一度必ず行くスーパーの買い物袋に入った野菜や肉や豆腐をぶら下げていた。私は明日の夕食で麻婆豆腐をつくる予定だった。スーパーの週に一度の特売日を利用して献立を考えていた。私がそいつの手に持ったスーパーの袋を凝視していると、そいつは私の顔や服装を凝視していた。目玉が飛び出そうなぐらい大きく目を開いて見つめていた。

「お、おまえは誰だ」

　極度の緊張からすっかり嗄れた声になって怒鳴った。すると同時にそいつが声を張り上げた。

「お、おまえは誰だ」

　全身から汗が噴き出した。突然目が痛み出す。無意識のうちに目が大きく開かれたままになっていたのだろう。汗が強烈に目にしみた。痛みをこらえながらそいつを見ると、やっぱりそいつも目をハンカチで押さえている。と、そいつが突然大声を上げた。

「そんなばかな！」そいつは玄関に掛けてある電波時計を指さしてぶるぶる震えている。「なんで今日が８月３１日なんだ。」

　そいつは自分のポケットに手を突っ込みレシートを取り出し、必死で見つめて、確信したという表情で、そのスーパーのレシートを私の前につきだした。

「見ろ！今日は９月１日だ。おまえの時計は電池が消耗して一日止まっていたんだろう。」

　これには私もむかっときた。それまでこの男を新手の詐欺師のような者かもしれないという疑念をもって相手の出方をうかがっていたのだが、頭に血が上ると恐怖感も警戒心も薄まった。

「ふざけるな、ＴＶで確かめたらどうだ。」

　と怒鳴り返すと、そいつに中に入れと手で合図した。するとそいつは当然とばかりに居間に入ると勝手にＴＶのリモコンボタンを操作してデータを画面に表示してＴＶの前に齧りつくように顔をくっつけて　日付を確かめている。なんども何度も目を擦りながら画面を見続けていたが、全身がガクガクと震えだした。

「一体どうなってるんだ」

そいつは醜く歪んだ青ざめた顔でＴＶ画面を見つめている。そいつの顔を見つめていると思わず吐き気がした。なんて醜い顔をしているんだ。ただ異形な顔をしているといのであれば吐き気なんてしない。でもあまりにも自分にそっくりな顔が恐怖で歪んでいるのを見るのは耐えられない気がした。ＳＦロボット小説でよく出てくる「不気味の谷」というやつかもしれない。ロボット

が人間に似ていないうちは可愛く思うのに、人間に似れば似るほどそのロボットが不気味に見えてくるというやつだ。全身に鳥肌が立って、寒くてぶるぶる震えだした。同じように震えているそいつを見ていると、ふと思いついてそいつの頬に手を当てた。そいつの左頬にも私と同じ大きな×印の古い傷があった。

　学生時代、私は学内のある組織と暴力的に対立していた。学生大会の議案である政治方針を巡って対立していたのだ。今の平和な学生組織ではそういうこともないのだろうが、その頃の学生大会は政治色一色で塗りつぶされていて、いろんな組織が安保や沖縄問題という政治問題などで激しく争っていた。単に学生の選挙でどの組織が多数派になるかということとともに、どの組織が暴力的に学内を支配できるかということにも重点がおかれていた。そんな状況で私の所属する組織は対立する組織と真っ正面からぶつかった。その乱闘の最中に私は顔に牛乳瓶の直撃を受け負傷した。当時、牛乳瓶は乱闘の必須アイテムだった。負傷したその時は体中にアドレナリンが全身を流れまくっていたから痛みなど感じずに学内を走り回っていた。しかし、乱闘の流れがある程度決まると、すぐに友人が私の腕を引っ張って、大学の近くの医院に連れて行ったので、その時初めて自分が負傷をしていると気がついた。しかし、その医院の受付には、私がさっきまで乱闘をしていた相手の学生が大勢いた。一瞬袋だたきに遭うのではと警戒したが、相手がみんな俯いて、私と目を合わせないようにしていることに気がついてほっと胸をなで下ろして、私もそしらぬふりをしていた。先着組が治療を終えて最後の私の番になり診察室に入った。一人の看護婦が私の傷の具合を見に来てすぐに奥へ引っ込んだのだが、そのあと医者ではなく、３人の若い看護婦がにやにやしてやって来て

「ねえねえ、どっちが勝ったの」

と、まるで野球の試合の結果を聞くようなのりで聞いてきた。

「いやー、なにせ、相手の数が多すぎてね」

と言うと

「ぼこぼこにされたの」

というので、思わず見栄を張って

「数で負けても力じゃ負けないよ。気合いが違うさ。」

と言って赤く腫れた拳をみせると

「おおーっ」

と三人が声をそろえて愉しそうに笑ったので、なんとなく気分がよくなって胸を張っていたのだが、いっこうに医者が治療にくる気配がない。看護婦が私のお尻にペニシリンをうってからもなかなか医者は現れない。ただ、看護婦が私の傷を見て心配そうな表情をしては奥に引っ込むということを三度ほど繰り返した後、憮然とした表情で若い医者が治療室に入ってきた。そして何も言わずいきなり左頬に局部麻酔の注射をうつと、まるで荷造りするような荒っぽい手つきで傷口を縫った後、やっぱり憮然とした表情で奥に消えた。やたらと早い治療のような気がしたが、とにかく治療がすんだと喜んで、複雑な表情の看護婦に、友人から借りたお金で治療費を支払い、仲間の集まる寮の部屋へ戻ったのだが、一週間後の抜糸のときには、同じ医院に行くのがためらわれて、大学の保健センターへ行った。保険センターの女の先生は

「縫った医院で抜糸をするのがいいのだけど」

といいながら傷を覆っていたガーゼをとったとたんに、一瞬凍り付いたような表情になった。

「これ、本当にお医者さんで縫ったの。まさか自分で縫ったのじゃないでしょうね。」

と言うので、きっと医院の医者が雑な治療をしたのだろうと思って

「そんな器用なことはできませんよ。」

と答えて、その時の医者の態度を説明したら、ふーっと大きな溜息をついて、

「もし、抜いた糸に膿がついていたら、もう一度縫わなきゃいけないわよ。ああいう事情だからかもしれないけれど、できたら同じ医院にいったほうがいいわ。」

その言葉を聞いたら、抜糸をしたらやっとお酒が飲めると喜んでいたのに、またあの憮然とした

表情の医者の治療をうけるのかと、憂鬱になってしまった。でも、

「あら、膿がついてない。」

という声に

「いえーっい。これで酒が飲める。」

と飛び上がって喜んだら

「でも、お酒はもう一週間ほど我慢した方がいいと思う。だって、普通は三針から五針縫う傷が、たった一針なのよ。」

と言われて、初めて自分の傷の具合が気になって、部屋の鏡を覗いたら、なんと左の頬には漫画やコミカルなドラマで悪役の頬に入っているような大きな×印が入っていた。それ以後、友人たちからは「切られ与三郎」とか「与三郎」と呼ばれるようになった。でもその当時はこれぐらいの傷なんて、２～３年で消えるだろうと全然気にしていなかったのに、還暦を過ぎても、かなり薄くはなったけれどしっかりと×印は残っている。こんな漫画のような傷は私以外には見たことがない。そんな傷が目の前の男あった。これは特殊メイクではないかと、手で触ったが、間違いない。傷口の盛り上がりや艶は本物の傷跡だ。だったらこいつは俺なのか？

　私は子どの頃から漫画が大好きで、中・高時代は同級生が読んでいるような文学作品は全く読まず、小松左京などのＳＦ小説ばかり読んできた。学生時代はＳＦを読んでいる暇がなかったので読まなかったが、社会人になると通勤電車の中でＳＦ小説を居眠りしながら読んでいた。だからタイムマシンとかタイムスリップという言葉には慣れ親しんでいたが、実際目の前にもう一人の自分がいるという状況は夢想だにしなかった。しかもこの男はたった一日未来の自分だという。明日の９月１日の午前十時に、いつものようにスーパーへ買い物に行って帰ってきたら、家に私がいたということらしい。こんな設定はＳＦ小説であったのだろうかと考えるが、仕事が忙しかったこともあってあまり多くの本を読んでいない私には初めてのように思える。つまり、私の読んだ小説のなかにもなかった初めての状況に出くわしてしまったということだ。私は子ども

の頃から初めての状況にはまるで痴呆のような対応しかできない。以前に経験したことや、あらかじめ想定したことにはそれなりに対応できるのだが、初めてのことにはまるで対応できない。ただ汗をだらだら流して固まってしまう。

　とにかく、ここは状況を正確に把握しなければならない。目の前の青ざめた男をテーブル代わりに年中出しているこたつの前に座らせ、台所から持ってきたマグカップに紙パックの酒をつぎ、男の前に出した。そいつは、さも当然とばかりにぐいっと酒を飲んだ。私も湯飲みに酒をつぎ飲んだ。そいつは、マグカップの酒を半分ほど飲むと、ふーっと一息つき、私を上目遣いに見ながら話し出した。

「問題点を整理しよう。まず、現在がいつかということだ。悔しいことにＴＶの表示では２０１２年８月３１日ということらしいが。」

この期に及んでもまだ「らしいが」という言葉を使っている。よっぽど現状を認めたくないのだろう。たった一日とは言え突然今までと違う世界に跳んできたんだ。誰でもそういう心境になるだろう。

「俺はただ買い物に行って帰って来ただけなんだ。別にタイムスリップするような異常なことは何もなかった。大きな地震も、交通事故も、目眩も何もなかったんだ。それが家に着いたら一日前の世界だった。」

そいつは俯いて歯をかみしめている。だが、パニックをおこしているようには思えない。それよりも冷静に考えようとしている。私が想定するこういう状況での私は、完全にパニクって、わけのわからないことを大声でわめき立てているのだが、この男が私だとは思えないくらい落ち着いている。酒を飲んだということそのものが、まだ酔いが回っていなくても心を沈静化させているのかもしれないが、もしこの男が一日未来からやって来た私というのなら、自分の意外な面に驚くともに、誇らしい気になった。

「今まで読んだＳＦ小説の中でこんなシーンがあっただろうか」

「いや、私の知る限りないな」

「だよな」

そいつはマグカップの酒を飲み干すと、黙ってそのマグカップを私の前につきだした。はやく酒を注げよといっているのだろうが、そういう横着な態度に腹が立った。わたしなら、こういう状況ではなるべく角が立たないように、もっと丁寧な動作をする。双方がわけのわからない状況にでくわして、カリカリしている時に、こういう横柄な態度は絶対にとらない。いくら相手が自分だからといって、この態度はなんなんだ。

「おい、早く注げよ。おまえは俺なんだからそれぐらい言わなくてもわかるだろ。」

この言葉にカチンときた私は、挑発的なことを言った。

「しかし最初からタイムスリップを前提にしているけれど、別な角度から考えようよ。」「どういうことだ」

「きみが私なら、私がタイムマシンどころか時間が縮むとか、逆行するとかということを信じていないことはわかるよね。」

予想どうり、そいつは激しく顔を歪めた。

「現代の理論物理学者のなかには根本的に間違っている人達がいると思っている。そうだよね。」

私はそいつの目を見つめる。

「理屈はどうでもいい。それより今ある状況をどのように理解するかということが一番大事だろ。」

「双方の理解を超えたことが起こっているようだから、それを無理に理解しろというのは無理な話だ。ここはまず、双方が理解できることや、共通する認識から始めるべきだ。」私はそいつの困った顔を見ているとますます意地悪な気持ちになってくる。そもそもこいつが一日未来からやって来た私だということもまだ確かめられたわけではないのだ。もし、多次元宇宙などという、そういうことを言っている学者でさえも具体的内容のわからない世界からやって来たに

せよ、今こうして自問自答している私とは別な存在と考えたほうがいい。こいつは私そのものではない。そう思うと心が急に軽くなって、口も軽くなった。

「時間が伸縮するとか、逆行するということはいつ頃から言われるようなったか正確には知らない。しかし、アインシュタイン以後一般人にもそういう考えが広く伝わった。今ではそれが常識のようになっている。特に物理学の入門書ではそうだ。」

「しかし、その考え方のもとになったマイケルソンとモーリーの実験には根本的な間違いがあった。しかし、その誤った実験が物理学を間違った方向に向かわせているというのに。」

男の顔には落ち着きが戻っている。アルコールがまわってきたきたというより、自分と同じ認識や知識を持った相手と話をすることで、落ち着きがでたのかもしれない。

「科学とは実験で確かめることだ。机の上だけで、数式だけで考えることではないはずだ。それなのにこんな簡単な大学の研究室レベルでできる実験をだれも再実験しないということはどういうことなんだ。」

「いや、微妙な振動による影響を避けようとするなら、大学の研究室レベルでは無理かもしれないね。あの実験の再実験も何度もおこなわれているらしい。しかし、その内容が問題なのだ。基本的な間違いが正されているなら、物理学の入門書や解説書にそれをきちんと書いているはずだ。現代の天才といわれるホーキングもマイケルソンとモーリーの実験が、観測者や光源の運動にかかわらず光速度が不変であることを証明する実験だと言っている。しかし光源の問題を放置した再実験ならその実験は何の意味もないことになる。言い換えれば、始めに理論ありきという自分たちにつごうのいいような実験しかやっていない可能性がある。もしそうであればアインシュタインを２０世紀最高の天才に祭り上げたような、なにかの力、例えば政治的な力のようなものがそうしているのかもしれないな。」

「ちょっと待て。おまえは、うっ、いや俺は、つまり、もう一人の俺はそうしてすぐに話をわき道にそらす癖がある。今、そこまで話を広げると、とてもじゃないが終始が着かなくなるぞ。」

糞、痛いところを突かれた。日頃から自覚していることなのに、こんなところで悪い癖をだしてしまった。特にこの男に言われると余計に腹が立つ。

「マイケルソンとモーリーの実験では光源が鏡や観測装置と同じ岩石の上にある。つまり地球の公転に対して同じ慣性系にある。それではそれぞれの観測装置は静止した状態と同じというわけだ。それをエーテルなどという得たいの知れないものを前提にしているから間違うことになる。」

「静止した観測装置ではどの方向へ向いた光も鏡に反射されて同じ時間に帰ってくる。当たり前のことだね。」

「光が向かう方向によって反射して帰ってきた時間が異なるのかどうかということなら、観測装置の外側の光源を使わねばならない。つまり太陽光を光源とした実験も合わせておこなわなければ、実験は不完全と言わなければならない。相対性理論の説明ではよく視点の移動が行われる。閉じられた系の光の運動を系の外側からみて、あれこれ論を立てているわけだが、あの考え方は光の速度が常に一定だということが前提になっている。しかし光源が動いていれば光の早さが増加すると考えればなにも難しく考えることはないのだ。それにはマイケルソンとモーリーの実験に戻ってもう一度確かめねばならない。」

「そう、当時の状況なら難しいかもしれないが、現在ならそれほどお金も手間もかけないで確かめる事ができるはずだ。世界中の研究機関で同時的にやればもっとすっきるする」

いい調子だ。なんだか私も愉しくなってきた。私も酔っ払ってきたのかもしれない。

「それをマイケルソンとモーリーの実験から１００年以上もたって、誰も太陽光を光源とした実験をおこなっていないということであればおかしいよな。日本の考古学と同じように、権威ある先生が一度言ったら、弟子たちはそのことを否定できないということか。」

こんどはこの男のほうから話をずらしだした。やっぱりこの男はもう一人の私なのだろうか。そいつの顔の傷をじっと見つめる。傷に関わる様々な記憶が甦る。

「そういえば、物理学の入門書の光に関することではおかしいことだらけだ」

そいつは私の追憶を破るようにまた話し始めた。

「光の屈折の説明では光の帯で説明しているが、それじゃあ、光の粒子や光の線ではどううなのかということが説明できない。それなのに光の屈折の説明ができているとしている。なんじゃこりゃーってなもんだよ。レンズの性質を説明する時は線で説明しているのにな。」

「そうそう、それに光の干渉についての実験も今から見れば不完全なんだよね。あの実験は１８０７年、トーマス・ヤングによる実験なんだけれど、当時のレベルからして、当然大気中でおこなわれたと思われる。また素材などからみれば、光の乱反射ということにどれだけ注意がおこなわれたのか不明だね。実験を完全なものにするには光の乱反射を極力抑えねばならないはずだ。だから真空中で乱反射を極力抑えた素材を使い、光源にもいくつもの種類の単一の波長の光を使わねばならないはずだ。」

「そうだ。マイケルソンとモーリーの実験も太陽光を単一の波長に分けて実験すべきだな。物理の知識などなくても実験となると、職人の勘がものを言う。」

職人の勘という言葉にふと我に返る。

「もうー、あんたは職人気質なんだから」

本社の会議で上司の説明に反論したときの自分より若い上司の言葉。

「俺はあんたと同じレベルにはできないよ」

部下に仕事のことで注意をしたときに帰ってくる言葉。

私が職場で得たものは、労働時間のわりには低いそれなりの収入と、同年代の事務職の男に負けない筋力だけだった。

「不完全な実験の結果を基にした相対性理論などの理論は不完全だと言わざるを得ない。理論学者は基本的な実験に帰らなければならないんだ。それでなければ砂上の楼閣を築くことになる。そこからは虚構の世界しか生まれないのだ。数学的な整合性や簡潔さだけをよりどころにしてはだめなんだ。理論のもとになった実験に戻らなければいけないんだ。その実験が適切に行われた

かどうかを検証せずに、いくつかの理論を矛盾なく統一することばかりに拘っていてはだめなんだ。」

「完全じゃだめなんですよ。」

職場の飲み会で同僚から突然言われた言葉。なんのことだかわけがわからず、杯を中途半端な位置で持って、相手の冷ややかな顔をぼんやり見つめていた。

「そもそも、エレガントな世界など、人間の頭の中にしかないものを、この世の真理のように考えるのは、もはや宗教なんだ。」

「そうだ。数式や数学は人間が生み出した人間の頭の中の世界でしかない。世界を認識する手段として数学があるだけだ。それを数式で表された世界が現実の世界だということはもはや宗教なのだ。欧米の物理学者にとっては、キリスト教などの唯一絶対的な存在の神に替わる新しい神を欲していたのだろう。拡大し続ける人間の知的欲望は、あれこれ制約ばかりする現存する神を煩わしく思っていた。そこに数学という新しい神が現れたということさ。だから数式に表せない世界は意味のないものになる。」

「おまけに、そうした数学を拠り所にしている物理学が、もっとも優れた学問だと自慢している学者もいる。まるで新しいおもちゃで遊ぶ子どもの様だ。」

「しかし、現代の物理学では理解できない説明できない暗黒物質やエネルギーが宇宙のほとんどを占めているとなれば、ビッグバンなどの理論はまったく意味のないものにるはずなんだがね。彼らにはそういう認識がないらしい。宇宙に存在するわずか４％ほどの物質を研究することから生まれた理論が、全宇宙をどうやって説明できるというのか。数学の理解できない一般人にはどうやっても理解できない高尚な世界ということなんだろうね。くだらねえ。」

「きみねえ、企画書を書くんなら、いつ、どこで、なにを、どのようにといった基本的なことをきちんと書きなさい。こんな数値目標のあいまいな、タイムスケジュールの入っていないものは企画書じゃないんだよ。やりなおせ。」

現実を無視した見た目に美しいだけの企画書をでっちあげるしか能のない幹部が怒鳴りつける。わざと大きな声で周りの部下たちに聞こえるように。私は見せしめとして怒られているのだ。こんな年配者で社内では学歴のある者でも仕事ができなければ容赦しないぞというポーズをとっているのだ。倒産した会社から再就職でこの会社に入ってきたと馬鹿にされないために、まずその職場で目立つ人間を多くの人の前で罵倒する。そこで自分に対する恐怖心を植え付ければ、その職場でうまくやっていけるという計算なんだろうということは私には見え透いている。こういう人物に限って現場の知識がないから、一対一で議論をしない。必ず多くの人の前で、自分の方が地位が上だという立場を強調して文句を言う。最初から相手の反論を封じた立場でなければ議論一つもできやしない。こちらも長年多くのわけのわからないクレーマーを相手にしてきているからそれくらいわかるが、だからといってどうすることもできない。それで気が済むのならどうぞといった気分だ。私一人が刃向かったところで、私一人が不利な立場に立つだけなのだ。誰も後についてこない。いつものことだ。

「すべての事象は絡み合っている。それを数学的に処理しようとして単純化しすぎるからおかしな世界を創造することになる。狭い範囲のことならそれで十分なんだが、宇宙のことまで考えるとそれでは誤ってしまう。」
「しかし、複雑なままでは何も考えられないさ。ある程度は単純な要素に絞って考えなければ先に進めない。」
「そうじゃない。俺の言ってるのは、なにごとも抽象化するその思考方法だ。」
ついに西欧的思考方法の批判までやりだした。この先どこまで脱線するのやら、まあいい、こうした議論は嫌いではない。むしろ学生時代を思い出してわくわくしている部分もある。職場ではこうした話はタブーだった。家庭内でこんな話をしても相手にされないだけだった。仕事にも日常生活にもなんの役にも立たないことを議論する。こうしたことは久しくなかった。学生時代が

無性に懐かしくなってきた。

「日本のように狭い所にいろんなものが共存している土地で生まれ育った人間と、辺り一面どこまでも草原や砂漠が続く土地で生まれ育った人間とは根本的に思考方法が違うんだ。」

この男は、すでに手酌で酒を飲んでいる。もうどれぐらい飲んだんだろう。かなり飲んだようだ。少し舌がもつれている。もともと私は酒に弱い体質なのだ。こんな早いペースで飲むとあとがかなりやばそうだ。でもいいや今の愉しい時間を大切にしたい。しかし、私は子どもの頃から世界史が苦手だった。夢野家の者は外国語に弱いという奇妙な雰囲気が家庭内に充満していたためかカタカナの名前を覚えるのが苦手で、人名も地名も頭の中で合体してぐちゃぐちゃになっていた。大学受験も初めから世界史ではなく日本史を選択するつもりだったので、よけいに世界史の授業は赤点をとらない程度にしか勉強しなかった。それが大学で政治活動に関わったために、しかたなくイギリスやソ連・ロシアの歴史の本を読み、ヘーゲルやカントなどの哲学書もほんの一口囓ったけれど、基本的な西欧の知識が欠けている。だから、この男もこれ以上論議を進めることはできないはずだ。私から口だししないで、黙って聞いていたら、この男の方から別な方へ話を変えるだろうと、ゆっくり酒を口に含んだ。

「俺は偏狭な民族主義者ではない。しかし、現在の世界が依然として西欧を中心としてまわっていることに苛立ちを感じているのだ。」

なにやら高校時代の私の思想に戻ったようだ。高校時代の私は熱烈な民族主義者だった。それこそ、現在の政治家が言うような美しい日本といったイメージを本気で信じていた。　軍国主義に染まっていた日本では、敗戦がそれまでの日本人の意識を大きく変えてしまった。日本の伝統文化を卑しいもののように考えるようなった。小学校では教師が「日本人は米ばかり食べているから戦争に負けた。アメリカ人のようにパンを食べなければだめだ。」と子どもに教えていた。ＴＶでは狭いダンスホールでロカビリーの曲に合わせて激しく踊る若者たちの姿が撮されていた。子供心にも、一体日本はどうなるんだろうかと心配していた。戦後生まれの私には戦争が終わったという開放感とは無縁だった。ただ混沌だけがあった。その後左翼思想の洗礼を受けたが、

そのことによって逆に本当の日本文化とはなんだろうかと考えるようになった。世間で大声で発信されている日本の文化とは、私からみれば、日本文化の一時期の姿でしかない。表面的なものでしかない。本当の日本文化とは、新石器時代・縄文時代まで遡らなければならないのだ。平安時代の上流貴族の文化や、江戸時代の武士の文化だけを日本文化などというのではあまりにも空しいことだ。そうはっきりと気づいたのは中年のオヤジになってからだが。今、目の前のもう一人の私は、世間で言われている日本文化をそのまま信じ込んでいたころの青臭かった私のように見える。

「全国の老人諸君。今こそ立ち上がれ。」

わちゃー、今度は左翼かよ。いくら懐かしい青春時代の私でもこれはストップさせねばいけない。もう一度物理学者の悪口に戻るか。

「物理学者はものを物としか見ていない。だから時間の逆行などということがなんの疑問もなく語れるんだ。」

男はおやっという夢から覚めたような顔で私の顔を見た。

「例えばこの酒だ。」

私は紙パックの酒を片手で持って私の顔の高さに上げた。

「これは物質としての酒というだけでなく、全人類の時間が積み重ねっているものだ。」

「なんだよ、マルクスの労働価値学説かよ。」

「いやそうじゃないんだ。マルクスは労働としての時間しか見ていなかった。しかし物を作るということは、たんに労働するということだけではない。この酒が造られるには、人類が酒を造るまでに費やした様々な時間が必要だった、時間が積み重ねられたといことだ。材料としての米を作るまでにかかった時間。それを酒に作るまでにかかった時間というだけではない。米を作るには人間と自然との対話が必要であり、その知識や技術は時間の結晶として形成される。全ての人工物がそうだ。それら全てが人間一人で作られたのではない。なぜなら人間はたった一人で生き

ているのではないからだ。人間社会のなかで物は作られるのだ。知識や技術はそうした人間と自然との対話。そして人間相互の対話の結晶なんだ。」

男の酔ってどろんとした目に光が戻る。

「そうだ、人類が現世人類になった時からの時間が蓄積されているのだ。数式に表せない時間が厚く美しく層をなしているんだ。」

「こうした考え方は、物理学者からすれば、そんなの関係ねえということだろうが、大学教授の肩書きをつけて、タイムマシンを語るにはこうした、時間を遡るということはどういう現象なのかきちんと説明しなければおかしんだ。子どもの様にただタイムマシンが可能だなんていっているだけでは、ただのほら吹きになるということを自覚していない。シュレーディンガーのように、量子の世界と私たちの住む世界は違うものだというほうがすっきりとはしている。しかし、量子の集合である私たちの住む世界が量子とは異なる運動をしているということは、量子が集合すると、量子を記述する物理学とは異なる力が働いていると考えるべきだろう。つまり異なった物理学が必要となるはずだ。それなのに、量子を記述する数式で私たちの世界を記述、説明するのはおかしいことだ。ビッグバン後の「ゆらぎ」なるわけのわからんことがおきて人間は一方通行の時間の中に生きることになったなんて、なんの説明もしていないことと同じなんだ。「ゆらぎ」なんて全く内容のない言葉を使えばどんな詭弁や珍説も可能になる。そもそもこの世の中は数値化できないことの方がずっと多いのだ。おまけにすっきりとした数式で表される事象など、ほんの限られた条件のなかのことでしかない。始めに数式・数学ありきではないんだ。そういう考え方では多様性ということが考えられない。だから現代の最高の天才といわれる物理学者でも生命について語ると、単純なダーウィニズムになってしまう。適者生存や自然選択だけでは、なぜ地球上に多様な生命が満ちあふれているのかまったく説明できないのに。」

「そうそう、生物は非合理的な行動をすることがよくある。最近ではいろいろな動物の生態がわかってきているが、人間からみるとまったく無駄だと思われる行動をとることが多い。食性にしてもそうだ。人間はなんでもかんでも食べるが、ほとんどの動物は限られたものしか食べない

。これなど、適者生存だと言えない良い証拠だ。なんでも食べた方が生存に有利なのに極めて限られたものしか食べないのは何故かということだ。また動物体型の進化にしてもそうだ。例えばキリンは現在のような長い首だから木の上の方の葉を食べるのに適しているが、突然変異で首が伸びるもとのサイズより少し首が伸びただけでは、まったくなんの役にも立たない。首が少し短い仲間より生存に適していると言えない。自然選択されないなら、その遺伝子は生き残ることに有利だといえない。」

「しかし、そうした何のためにあるのかわからない不思議な体の進化や行動があるから、地球上には多くの生命が存在すると言える。今まで地球上の生物の多くが一度に滅亡しかけたことが何度もあってもここまで繁栄してきたということは、結果的には生命そのものが持っている多様性がそうした結果をもたらしたといえる。遺伝子はただタンパク質の設計図にしかすぎないのに、たった一つの受精卵から、人間なら６０兆ほどの数の細胞に分裂し、それぞれの臓器などに分化しているのはなぜなんだろう。遺伝子にはそんなことは少しも書かれていないのに、極めて整然と分化が行われているように見えるのはなぜなんだろう。それは、それぞれの細胞が話し合って役割分担をきめているからじゃないんだろうか。」

　男の顔が奇妙に歪む。

「まさか、オカルトの世界に入ろうってことじゃないだろうな。」

「いや、話し合うというのは比喩であって、雑な言い方をすれば細胞間の化学物質や蛋白質などの出入りによって隣り合う細胞が情報を交換しているということだ。そうした結果が細胞間の分化になるということだ。こうした考え方は生物学者がいっていることだ。オカルトではない。」

「しかしおまえが言うとオカルトに聞こえるぞ。」

この男はこれから私が話そうとすることを感じているのかもしれない。明日の私なら当然のことだろう。

「つまり、私という体は、母親の卵子に進入した父親の精子とによる一つの受精卵が時間の経過

に従って細胞分裂がおこる。新たにできた隣り合った細胞同士は相互に化学物質や蛋白質などを出し入れすることによって、細胞の分化が起こり、臓器などが形成されていく。こうした細胞間の情報交換に外的環境が加わる。胎児の時は母親の子宮内環境だ。この子宮内環境は母親の外的環境に影響される。胎児にとってマイナスの大きな要因にはアルコールや薬物などがある。これらは臍帯を通して、直接胎児に摂取される恐れがある。こうした科学物質の直接の影響以外にも母親の感情が胎児に影響する。胎児に脳が形成された後では、母親がストレスを受けると胎児が顔をしかめるといったことが言われている。つまり、母親の感情が胎児の感情に影響を与えている可能性があるということだろう。このように私という人間の体は細胞間内のタンパク質相互の情報交換から始まり、細胞間相互の情報交換と共に、母親の子宮環境に従って作られたと言える。ＳＦ的に言えば、同じＤＮＡを持った胎児でも人工子宮で育てられたのか、母親の子宮で育てられたのかということで、体も性格も異なるということだ。ましてや、生まれてから育つ環境によって、肉体も心も大きく異なってくる。」

「ＳＦの世界でお馴染みのクローン人間だからオリジナルの人間とそっくり同じ姿で性格も同じということにはならないということだな。」

「東大などでは長年双子の研究をやっているのだが、同じＤＮＡを持つ人間をまったく異なった環境で育てるということは難しいのだ。通常は一卵性の双子は同じような環境で育てられる。兄弟・姉妹ではどちらが兄や姉かという差別はおきる。しかし、基本的に同じような条件で育てられる。そうすると同じような体型や性格になる。だから一卵性の双子における体型や性格の違いを研究することは難しい。研究室のマウスのように人工的にまったく異なった環境で育てられない。人権の問題になる。だが、世界中の研究者がネットで情報交換をし、もっといろんなデーターを集めれば、人間における環境と体型・性格の相関関係があきらかになってくるはづだ。」

「だけど、そこで問題になるのは、性格をどのように分析するのかということだろう。俺たちが子どもの頃は３つの体型による３つの性格の違いといったかなり雑な分析がおこなわれて保健体

育の教科書に載っていた。現在日本人に大流行の血液型による性格分類で示されている性格のタイプなんて、誰にでも当てはまることばかりを敢えて、その血液型の特徴として強調している。」

「血液型による性格分類はまったく科学的根拠がない与太話だ。」

「性格のような心の問題は安易に分類できるものではないだろうし、まだまだよくわからないことが多い。心の問題にしても、ひどい医者はなんでもかんでも病気にして薬で治そうとする。人前であがることまであがり症という病名をつけて薬を飲めという。人前であがるのは、人間として普通のことなのに。普通でない病気だという。とんでもない話だ。こういう考え方では人類全体が病気だからみんなが薬を飲み続けなきゃならんということになる。とんでもない話だ。」

「まあ、程度の問題なんだろうけれど、安易に薬を使うのは危険だと思う。一時期、アメリカで鬱病の薬を常用していた青年たちに自殺者が増えたということがいわれていたけれど、薬には副作用があると思った方がいい。薬とはそういうものなのだと思ったほうがいい。ただ毎日苦しんでいる人にはその苦しみから抜け出す手助けとして薬を使うのはありだと思う。私も会社で働いていた時は、月に一度の月例という全社の報告会が嫌でしかたがなかった。狭い部屋に大勢の社員やパートが集められた所にいると、月例が終わるまでずっと俯いて緊張して汗を一杯かいていた。しかし、会議で自分の意見を言うときや、他の社員と議論しているときは、逆に生き生きとしていた。真っ直ぐに相手を見て喋っていた。人間とはそういう変な動物なんだ。」

「ところで、その変な心の問題だが、心が体に指令を出す０．５秒前に、その指令が出ているという話は当然知っているだろ。俺が知っているんだから。」

男は、薄笑いを浮かべて私の顔を見た。なんとなく不愉快な気分になる。

「つまり、自分の心だと意識している『自分』以外に別な『自分』がいるということだ。」

男は、今度は私の目をじっと見つめている。やっぱりなと思う。こいつも気づいていたんだ、時間を飛び越えることが不可能なら当然考えるだろう。

「昔の人が考えたような、頭の中に小人さんがたくさんいて、その相談した結果で人は動いているということかな。」

「冗談のつもりか」

さっきまで、酔っ払ってヘロヘロしていた男が、上目遣いで私を見ている。まるで取り調べをしている刑事にでもなった気分なのか。それならそれでこちらも腹をくくらねばならない。

「人間の心と体は環境に大きく影響を受けるとさっき言っただろう。私の考えでは心とは体じゅうの全細胞がお互いに話し合ってできていると思う。心は脳だけにあるんじゃないんだ。脳は全ての細胞から送られてきた情報を整理するところなんだ。情報とは五感だけじゃない。全ての細胞から情報が送られてくる。そうした情報が整理されて心が生まれる。隣り合う全ての細胞が情報交換をして、いわば話し合っている。そうした話し合いの結果が心だと思う。」

「オカルトかＳＦネタかよ。」

男の口は軽いが顔は笑っていない。真剣だ。

「人間は昔から五感ということを認識してきた。五感をもとに脳で思考が形成されていると考えてきた。でもね、人間の思考には五感以外の感覚や情報が関わっているんだ。例えば体内のホルモンが気分に大きく影響する。季節によってホルモンのバランスが崩れると気分・感情が影響される。女性の生理と感情のように密接な関係があるものもある。確かなことはわからないが月の引力にも影響されているかもしれない。各臓器からの情報も感情を形成する大きな要素だ。そうしたことは、体の細胞全体で感情や気分といったものが作られているということだ。」

「それじゃ、『自分』と意識している自分とはなんなんだ。」

「体の全細胞が作り上げた幻だ。」

「なんのためにそんなものを作ったんだ。」

「わからない。たぶん人間だけがそんなものを作ってしまったんだろう。進化とはそういうものなんだ。すべてに意味があるのではない。むしろ意味の不明なものがほとんどだ。そして、その自己意識が人間をここまで活動範囲を広げさせたともに、心の病気を作り出した。」

「遺伝子レベルで人間と１％ほどしか違わないボノボは手話で自分のことを私と表現するぞ。」

「自分のことを私と表現することと、自分が今なにを考えているのかを意識することとは別な次元のことだ。ひょっとしたらこういう言い方ができるかもしれない。『私』とは体の全細胞が担ぐ御神輿に乗った何かだと。」

「それで御神輿に乗った何かさんはそうしたことを自覚してるのかね。」

「たぶん普段は自覚していないと思う。」

「それじゃ、心の病気ってなんなんだ。」

さらに男の目つきが鋭くなる。あれほど飲んだアルコールがどこかへ行ってしまったような顔をしている。こいつも核心に近づいていることを感じている。

「御神輿に担がれた心が身体の未来に危機感を持って、解決方法が見つからなくて苦慮している状態かな。」

「身体の未来だって。」

「人間だけが、なぜか時間を考えるようになった。明日を考えるようになった。だから未来を予測して身体の危機を感じる。それを避ける方法を考える。しかし、その方法が見つからないときに通常ではない思考や行動をとるようになる。人間以外の動物には時間の概念がなく今日しかないから心の病気にならない。」

「明日があるというのは希望だけでなく、絶望も意味するのか。」

「そうだ、私があまり深刻に悩まなくなったのも、残りの人生が少なくなったからだ。今ある苦痛もそれほど長く続かないと思うようになって、人生が愉しくなった。」

「人間は時間の概念を生み出して、文化・文明を産んだがそれとともに悩みも生み出したというわけか。」

「そうだ、時間は人間が生み出した人間にとって両刃の剣なのだ。」

「けっ、逆パンドラの箱かよ。」

「そう、人間以外の生き物にはなんの意味もない概念だが、自己意識を持った人間には強烈な毒にもなる。」

「それじゃ、明日のおまえである俺はおまえにとって毒ということかな。」

男は酒臭い息が感じられるほど近くまで顔を近づけてきた。酒で真っ赤になり脂汗でギラギラ光っている男の顔を見つめていると、頭の中にたくさんの蛆が湧いてきたような不快感で満たされ凶暴な意志が湧いてきた。これ以上この男の顔を見ていたくない。ここで決着をつけてやる。

「毒かどうかはわからない。量子的に毒と薬が重なっている状態ということではない。人間の人生なんてそんな単純なものではないからだ。ある場面では毒になっても他の場面では薬になる。毒でも薬でもないこともあるし、毒であると共に薬であることもある。人生とはそういうものだ。問題はこの私の体がどのように判断しているかということだ。私を御神輿に担ぐことに危機を感じているのか、それとも私でこのまま行くつもりなのかということだ。」

「ようするに、体はおまえという心をとるのか俺という心をとるのかということか。」

「体の全細胞が相談して私という心を御神輿に担いでいるといったよね。そうだとすると体にとって都合の悪い心は御神輿の上から下ろさなければならないんだ。でも、これはやっぱり謎なんだけれど、一度担ぎ上げた心はというよりキャラクターといったほうがいいだろう、担ぎ上げたキャラクターは簡単には下ろせないんだ。そこで別なキャラクターと同居することになる。そのキャラクターはその時々に応じて御神輿の上に担ぎ上げられる。他のキャラクターを御神輿の横で待機している。」

「多重人格というわけだ。」

「幾つもの違う面を持つのは人間として普通のことなんだ。でもそれらは一つのキャラクターが統括しているか、自分の要素として認識していることなんだ。しかし、多重人格になると、それぞれのキャラクターが互いに別のキャラクターとして認識していて、他のキャラクターが御神輿に乗っている時は、そのキャラクターが体験したり考えたことはあまり認識していないんだ。通常御神輿に乗っている主人格は、時折あらわれるキャラクターを明確に認識していない。まった

く認識していないこともよくある。」

「つまり、俺とおまえは同じからだが担いでいるキャラクターだということだな。夢野市太郎Ａと夢野市太郎Ｂということだ。それじゃあ聞くが、おれとおまえとどっちが主人格なんだ。」

「ちょっとまって。その前に多重人格の場合、それぞれのキャラクターがこうして論争することはないんだ。つまり、私たちは多重人格のキャラクターというほど完全に分離独立したキャラクターではなく、もっと親しい関係だと思う。」

「主人格自身が作り出した妄想というのか。だとしたら御神輿を担いでいる体はどう判断しているんだ。」

「そこのところがうまく説明できないのだけれど、なんらかの事情で、体は主人格だけでは体を維持できないと判断した。そこで、新しいキャラクターを作り出したが完全に独立した状態にはならなくて、結合双生児のように一部がくっついたキャラクターになってしまった。だから、今私たちが現実だと思っているこの状況は、私の頭の中だけの世界の可能性がある。私はもう一人の私と頭の中で話しているだけかもしれない。たぶんそうなんだ。」

「それはつまり、ここが俺の頭の中の世界で、本当は今日が９月１日の可能性もあるということだ。」

「まあね。可能性としてはね。」

「とすれば、俺はどうすれば正気にもどれるのだろう。」

「正気に戻れるかどうかはともかく、この状態をいつまでも続けるわけにはいかないね。」私は、私の肉体から見放されたのではという恐怖と必死に戦いながら言葉を探した。

「まず、なぜ私という肉体が我々という二つのキャラを作ったのかということだ。何か肉体にとって不都合なことがあったんだろうか。」

「そんなのはないね。仕事を辞めてから、職場の人間関係で悩むことがなくなった。これは大きい。俺の一番の悩みはそこだったんだからな。」

「確かに職場での人間関係のストレスはひどかった。私の頭からほとんど毛がなくなったのも遺伝ではなくストレスからだ。いつ過労死するだろうかと思って働いていた頃、突然毎日髪の毛がひどく抜け出して、枕にも毎日多量の毛が貼り付いていた。そして気がつけば豊かだった頭髪がすっかり少なくなって、頭はすすきの野原になっていた。」

「それなのに、職場では風俗遊びで変な病気をうつされたと言われたな。」

「だから、退職したらそうしたストレスがなくなったはずなのに、私の体はそう判断していない。」

「条件反射泣きはどうなんだ。」

「あんなのは日常生活になんの差し障りもない。」

「しかし、やはりある兆候と考えられるだろ。俺の人生はなんなんだったんだろうって思っていただろ。働く為に生きているほど、仕事に自分の時間を奪われていたのに、突然会社がつぶれてクビになって、再就職をしようとしてもまともなものはなく全て使いつぶしの仕事ばかり。どん底に落ちることによってやっと他人の心を思いやることができるようになったが、今までそういうことがなかったから限度がわからず、ただただ涙と鼻水を垂れ流す。」

「でもそれが原因で二つのキャラができたのなら、二つのキャラの差異がわからない。」「俺は過剰に他人の悲しみに同調しないさ。いつまでもめそめそしているおまえはさっさと消え去るべきだろう。」

「でも、多重人格について書かれた本を読んでいると、それぞれの人格は一緒に出てこないし、それぞれの人格同士で話し合うことはない。それなのに私たちは二人で話し合っている。変じゃないか。他に原因があるはずだ。」

「俺とおまえと二人いることを解消する早い方法があるぜ。」

突然男の腕が伸びた。はっと思った時は遅かった。男の腕が私の首を締め上げている。うかつにも論争に夢中になりすぎてこうした実力行使を考えていなかった。私の首を絞める力は強烈だった。老人にしてはなんていう怪力だと、今更ながら長い期間肉体労働で鍛えた自分の筋力に驚

いた。男のでかくてがっしりとした手はしっかりと私の気管と頸動脈を掴んでいて、すぐに意識が遠くなってきた。

「きゃー、いっちゃんがたいへん。誰か先生呼んで来て。」

突然小学生ぐらいの女の子の声がした。なんだか懐かしい。

「早く、いっちゃんが死んでしまいそう。」

そうだこの声は小学校二年生の時同じクラスだった花ちゃんの声だ。

「あっ、美代ちゃん先生！いっちゃんが大変。」

えーっ、美代ちゃん先生か。隣のクラスの先生だったけれど、若くて明るくて美人でみんなの憧れの的だった先生だ。ドタバタという足音が聞こえる。やっぱり美代ちゃん先生はボクを助けに来てくれるんだ。嬉しいな。ボクの担任の先生は年をとっていて、ヒステリックでいつもボクを怒鳴り散らした。

「あんたはまた宿題を忘れたの。本当に毎日じゃないの。それでよく学級委員長をやってるわね。毎日毎日忘れ物ばかり。宿題忘れなければドリルを忘れる。いいつけた仕事は忘れて帰ってしまう。あんたは健忘症か。まだ小学生のくせに健忘症なの。」

今日も学期始めだというのに夏休みの宿題を持ってくるのを忘れて、教室の掃除が終わったら職員室に行くことになっていた。

「あなたなにやってるの。馬鹿なことはやめなさいっ！」

美代ちゃん先生の大きな声に、ボクの首を絞めていた力が弱まった。少し楽になって目を開けると、目の前には真っ赤な顔をして涙と鼻水でぐじゅぐじゅになった、小学校二年生のボクの顔があった。